

盛圭太一糸のほころ美

今回、盛はメイン作品として展示室に幅8m、高さ2m程の湾曲した衝立状の巨大な構造物を立て、弧の内側の面にドローイングを展開した。そのドローイングは糸や毛糸や銅線をグルーガンで画面に貼り付ける独自の手法による。離れた位置から見たり、写真で見たりするとペンやカラス口で描かれたかのような細くくっきりとした線の集合に見えるが、近づくと糸の素材感が感じられ、また弛^{たる}んだり、絡まったりした箇所も見え、印象が変化する。

横長の画面にパノラミックに展開するイメージは実に複雑でつかみどころがない。四角や三角や丸からなる形態は互いに連結して質量をもった構造物を形成したかと思えば、ふわふわと漂い無重力の感覚も見る者に与える。また、一見奥行きをもった空間が作り出されているようでありながら、画面には無数の消失点が設定され、その空間はここに人間が踏み込むことはできまい、と思わせるような不可思議な状態と化している。

盛は糸を用いたこのようなドローイングのシリーズに「Bug report (バグ・レポート)」というタイトルをつけているが、これはコンピュータ・プログラムに欠陥や脆弱性が見つかった際の報告文章のことを指す。作者は複雑かつ緻密に張り巡らされたリニアな糸の造形にときおり出現する「弛み」や「絡まり」を、プログラムに潜む「バグ(欠陥)」になぞらえているのである。現代において私たちが恩恵を受ける複雑かつ高度に組み上げられた様々なシステム—電気、ガス、水道などのライフライン、飛行機や電車などの交通網、インターネットなどの情報テクノロジーなど—に自然災害や事故あるいはテロによってたとえ小さなものであっても「綻び^{ほころ}」が発生したならば、甚大な被害が発生しうることを私たちはニュースや実体験を通して知っている。仮に盛の作品に「無題」というタイトルがつけられていても、その造形の美しさや不思議さを味わうことは可能であるが、「バグ・レポート」という絶妙なタイトルがあるからこそ、盛の作品は秩序の中に破綻が潜む不安定な現代を生きる私たちに思考を促し、無限のイマジネーションを与えるのだといえる。

盛はこの巨大な壁画を計5日間をかけて制作（うち2日間は公開制作）したが、休憩の際などに作者から制作にまつわる興味深い話を聞くことが出来た。例えば、糸を使うのは線を引く上で大変コスバがいいとのことであった。糸だとピンと伸ばせば直線が容易に引け、曲線も小刻みに角度をつけることで生み出すことが出来る。消すにしても絵具だと上から塗りつぶすなどの必要があるが、糸だとカットしてやれば瞬時に済ませることが出来る。そのつど画面で様々なことが発生、展開し、それに素早く反応するのが大変である、といったようなことも言っていたが、制作をする際の盛は実に小刻みに素早く動いていた。Aという部分に手を加えると、次はBやCの部分に手を加え、ふたたびAに戻る、という動きをスピーディーに反復する。見学していた観客から、制作時には何を考えているのかと聞かれ、盛は、何も考えていないと答えていた。それはおそらくアスリートが運動の各瞬間で様々な情報を分析し体を動かすのと同様に、いわば言語を介さない思考を続けているということなのだろう。

制作は弧の内側の曲面の表面へのドローイングが一段落すると、糸を空間の中で様々に交差させるフェーズへ移行した。そして最後は画面の端から端を一本の糸が弧を描いて垂れ下がる造形で制作は締めくくりを迎えた。壁面の弧と糸の弧の対称性が美しく、浮遊感にあふれる糸による造形が延々と繰り広げられ、最後は糸が重力にまかせてだらんと垂れ下がるというその対称性も実に美しいものであった。

(牧野裕二)